

対等な関係性と相互学習をめざした地域日本語教育

－「お話しグループ」5回目の実践から見たこと－

岡田 亜矢子

【キーワード】 相互学習・やりとり・手段、方法・役割、役目・地域日本語教育

1 はじめに

2006年度春学期より、新たに地域日本語教育実践研究(一)が開講された。実践の場として「わせだの森」を立ち上げ、院生7人が5つのグループに分かれ、地域に在住する外国人を対象とした実践を行った。本稿では、筆者が関わった「お話しグループ」について分析、考察する。お話しグループにおける理念と目標は次の通りである。

- ・ 理念 参加者全員が各々の生活における様々な疑問、問題、興味関心について語り合いながら、相互に学び合う場を創る。先生－生徒という関係ではなく、参加者全員が対等な関係を築く。その際に、生活言語、共通言語としての日本語を使用し、コミュニケーションを図る。
- ・ 目標 参加者全員で生活に関わるトピックについて語り合いながら、自分の言いたいことを日本語で表現する。また、相手の言いたいことを理解する力もつける。

2 地域日本語教育に関する先行研究

日本においても多文化共生社会をめざすと言われるようになって久しい。日本の各地域で定住外国人に対する様々な支援が行われている。そうした支援で特に多いのは日本語を指導するもの、つまり日本語教室型の支援である。地域に在住する外国人が日本人同様、社会に十全に参加できるようになるためには日本語習得が大変重要であると、支援する側もされる側も考えている場合が多い。多くの地域で、日本語母語話者である日本人(以下NS)がボランティアで日本語非母語話者(以下NNS)に日本語を教えている。多文化共生をめざすとは、先にも述べたように、NS・NNS共にその地域における住民で、対等な関係性が求められている。その対等な関係性を構築するために支援も行っているわけである。しかし日本語を指導することがNSからNNSへの一方的なものでしかない場合、皮肉にも地域がめざす対等な関係とは逆の方向に向かってしまう場合がある。森本(2001)金・野々口(2004)は、NS・NNSの関係が、「教える(先生)－教えられる(生徒)」「支援する－支援される」というカテゴリー化を通して、無意識下で不均衡な力関係を生み出している場合があると指摘する。岡崎(2002)は、対等な関係構築をめざし、NS・NNS

双方にとっての学びの場、相互学習の場を提供するよう提案する。そこで学ぶ日本語は「共生言語としての日本語」（以下、共生日本語）とし、NNS だけでなく NS も学んでいくものとしている。以上のように、地域日本語教育を対象とした様々な研究が行われている。しかし、実際の相互学習活動場面におけるやりとりや、そこで NS・NNS が互いを理解する際に使った具体的な手段・方法、「共生日本語」と呼ばれる言葉そのものを記述した文字化資料はほとんど目にする事ができない。そこで本稿では、お話しグループの活動から実際のやりとりに現れた言葉を通して具体的な手段・方法を分析する。そしてどのようにして対等な関係構築と相互学習の場の提供につながっていったかを考察する。

3 研究の目的と範囲

本稿における研究の目的は次の二点を明らかにすることである。

(一) NS・NNS 各々が、いま、ここで、具体的にどのような手段・方法を使って、相手が伝えようとしていることを理解しようとしていたか。

(二) NS・NNS 各々がトピックの中でどのような役割・役目を果たしていたか。

(一) では、NS・NNS 各々の意味交渉や言い直しなどの具体的な行動・行為を分析する。

(二) では、やりとりへの参加形態やその場でどのような役割を果たしていったかに注目する。特にファシリテーターとして参加した NS は、その役目だけを果たしたのか、それとも対等な一参加者ともなり得たのかを考察する。尚、本稿ではやりとりを行うときに使用される手段・方法の分類、及び、相互理解が達成されたということは研究の目的としない。この実践でどんなこと（手段・方法）を行っていたか、理解できたではなく、理解しようとして何をしていた（行動・行為）のかという事実を明らかにすることを目的とする。

4 研究対象の概要と研究方法

実践研究（一）では実践の場として「わせだの森」を立ち上げ、2006年5月13日から7月15日の10週間、毎週土曜午後1時半から3時まで、計10回の実践を5グループに分かれて行った。本稿ではその一つ、お話しグループ5回目（6月17日実施）の実践を取り上げる。参加者の詳細は以下の通りである。NNSの日本語は初級後半レベルである。

参加者	出身	滞在歴	実践への参加 (NNS)	実践での役割 (NS)
NNS1 (会社員)	インド	約2ヶ月	今回で3回目の参加	
NNS2 (日本語学校生)	韓国	約6ヶ月	今回で2回目の参加	
NS1 (日研究生)	日本			ファシリテーター
NS2 (日研究生)	日本			TA ※

※この回で TA は前半部の前半にだけ参加している。

5 回目の実践は休憩約 10 分を間に挟み、前半約 45 分、後半約 40 分行われた。前半は、トピックの内容でさらに前半・後半部分に分けられ、後半も同様に前半・中盤・後半部分に分けられる。休憩以外はすべて録音され、文字化された。本稿では、前半における前半

部分と、後半における前半と後半部分から、特にやりとりが見られた箇所を取り上げ、談話資料として分析する。

5 分析結果

5-1 手段・方法の分類

今回の談話資料から 17 種類の手段・方法が観察された。分類方法に関しては、岡崎 (1994) による相互調整行動、大平 (1999) による言い直しの方法を参考に、筆者の考えを加えて新たに分類を試みた。以下、それぞれについて解説する。文字化の表記方法はザトラウスキー (1993) に準拠する。文字化の下線部は分類に関連する箇所である。

5-1-1 言い替え

- ・他言語の使用 英語や母語を使って言い替える。
- ・説明、パラフレーズ もとの語彙の意味を説明する。例 1 では身体にいい食べ物の意味を説明している。

(例 1) NS1 : =ごはんを食べます。でも、もっと元気になりたい、から食べますか?

- ・発音の言い替え NNS による発音を NS が適切な発音に言い替える。
- ・同義語、類義語 もとの語彙と同じ、あるいは近い語彙に言い替える。
- ・対義語 もとの語彙と対応する意味の語彙に言い替える。
- ・具体化、具体例 より具体的な内容を尋ねるために具体例をあげたり、下位語を用いたりする。言語だけでなく絵を描いたりする場合 (描写) もここに含む。例 2 では身体にいい食べ物についてより具体的に尋ねようとしている。

(例 2) 1NS1 : =サ、サプリメント? (0.3) って書いてありました?
2NNS2 : うーん、
3NS2 : 豆腐とか?

- ・単純化 当初言われていた箇所が回避・省略されて、単純な形式に言い替える。例 3 の 2NS1 では「近いから『カルチャーショックはないということですか?』」を省略し、肯定文の形式に言い替えて質問している。

(例 3) 1NNS2 : んー韓国、は、日本、は、近い、うん。
2NS1 : 近いから、カルチャーショックありましたか?

- ・ジェスチャー 身振り手振りを使って、ものの形や行動などを現そうとする。

5-1-2 先取り発話・代弁

相手が話している途中で、相手が言おうとしていることを先取りし、自分が代わりに発話する行為 (先取り発話、例 4)。同じく相手は話しているが言いたい言葉が見つからず言

いよどんでいるときに、相手の言いたい言葉を推測して自分が代わりに発話する行為（代弁、例5）。

(例4) 1NNS2: 韓国では、あーいー、わかい人?若い人ーはー//だい、
2NNS1: //払い、払います。

3NNS2: =代金別々払います。

(例5) 1NNS2: アメリカのー、んー (1.4) アメリカのー、んー、けー、け//
2NS1: //健康?

5-1-3 理解確認

- ・理解確認 相手の発話を適切に理解できているかどうか、自分の解釈を相手に確認する行為。「代弁 (5-1-2)」と似ているが、「代弁」は発話の途中で行われる。「理解確認」は相手発話が終了した後、こういうことだろうと自分なりに推測した代弁と考えられる。その場合は理解確認とする。

(例6) 1NNS2: //せかいの中でー、たべものについてー、んーと、けーき?げんき、
2NS1: げんき。元気。元気になる食べ物?
3NNS2: うん。
4NS1: ということですか?

- ・聞き返し 相手の言ったことが完全には理解できず、聞き取ったことをそのまま繰り返して聞き返す。(上昇イントネーション)

(例7) 1NNS1: どのごはんと、と、んー何か、太、ら、ない//
2NS1: //太らない?

- ・表記 音声だけでは表現できず、文字で書いて示す。漢字で書いて意味を確認する場合もここに含む。

5-1-4 繰り返し

相手の言った言葉をそのまま繰り返す(下降イントネーション)。

(例8) NNS2: //んー。元気 (0.5) @たべもの@
NS1: たべもの//

5-1-5 意図しない話題の受け入れ

やりとりにおいて相手が話の流れを急に変えても、聞き手は新しい流れを受け入れて、会話を維持していく。例9の2NS1の質問に対して、3NNS2は答えていない。しかし5NS1では3NNS2の発話を受け入れ、以下会話は続行される。

(例9) 1NNS2: 韓国でー、料理作るときー使います//
2NS1: //どんな油を使いますか?韓国で。
3NNS2: キムチ、とー、ごはんとー (0.5)
4NNS1: まぜてー、
5NS1: 混ぜて、炒めますか?

5-1-6 アプローチの変化

もとの質問を細分化したり、質問の視点を変化させる。例10は例9の続きである。2NS1の質問は一旦保留にされ、3NNS2の発話を受け入れてやりとりを続行した後、19NS1で改めて質問をしている。

(例10) 18NNS2: 炒めますとき、使います。
 19NS1: オリーブオイルを//使いますか?
 20NNS2: //はい。||

5-1-7 引き継がれなかった発話(アプローチの変化でも再び現れない)

発話したが、その発話が開き手に引き継がれず、別の話題で話が進行する。その後その発話は消えてしまい、再び現れない。「アプローチの変化」でもこの現象は起きるが、後になって最初の発話と同じ意図の発話が再び現れている点で異なる。例11では3NNS1の発話に対して4NNS2は答えていない。その後もNNS2を中心に話が進行され、結局1NNS1、3NNS1と同じ意図の発話はその後現れなかった。

(例11) 1NNS1: どのごはんのと、と、んー何か、太、ら、ない//
 2NS1: //太らない?
 3NNS1: =太らないと、そのごはんについて//
 4NNS2: //しん、新聞でー、読みました。

5-1-8 不理解の表明

理解できないということをはっきり述べる。

5-2 役割と手段・方法の頻度

分析対象とした談話資料は、前半の前半部分「トピック決め」、後半の前半部分「カルチャーショック」、後半の後半部分「納豆」「キムチ」「ヨーグルト」「オリーブオイル」の6つである。各トピックにおいて、それぞれがどのような役割を果たしながら、具体的にどのような手段・方法を用いて自分の言いたいことを話し、また相手の言っていることを理解しようとしていたのかを考察する。

5-2-1 「トピック決め」(前半における前半部分)

今回話すトピックを決めるため、ファシリテーターであるNS1がNNS2に何を話したか尋ねるところから始まる。ここではまずNNS2をトピックの中心として、他の参加者が質問した。途中から中心がNNS1に移った。お互いによく分からない箇所がマークされると、各自が調整を試みて話を続けている。トピックにおける各自の役割、用いられた手段・方法の頻度は次の通りである。

¹宮崎(2005)では、接触場面における会話の中で不適切さが起こった場合、会話参加者の誰がその問題をマークし、調整行動をとるかに着目して、分類を提示している。

表1 (左=トピックの中心がNNS2/右=トピックの中心がNNS1)

手段・方法	NNS1	NNS2	NS1	NS2	計	割合 (%)
他言語の使用	1 / 1				2	1.5
説明・パラフレーズ	0 / 3		1 / 1	0 / 1	6	4.4
同義語・類義語	2 / 0	2 / 0	5 / 3	0 / 1	13	9.6
具体化・具体例	0 / 1		1 / 0	2 / 3	7	5.1
先取り発話・代弁		0 / 1	2 / 5	0 / 5	13	9.5
理解確認	1 / 0		7 / 5	0 / 3	16	11.8
聞き返し	2 / 0	0 / 2	5 / 3	1 / 1	14	10.2
繰り返し	7 / 6	1 2 / 3	1 2 / 6	4 / 3	53	39.0
意図しない話題の受け入れ			0 / 2		2	1.5
アプローチの変化			0 / 1		1	0.7
引き継がれなかった発話	1 / 0		0 / 1		2	1.5
不理解の表明		1 / 1			2	1.5
ジェスチャー	0 / 2		0 / 3		5	3.7
計	1 4 / 1 3	1 5 / 7	3 3 / 3 0	7 / 1 7	1 3 6	1 0 0 . 0
	2 7	2 2	6 3	2 4		
発話回数	2 3 / 6 8	4 8 / 2 0	4 2 / 4 3	9 / 3 5		

表1における各々が使用した具体的な手段・方法の結果を回数で見ると、NS1が他の参加者の二～三倍ぐらい手段・方法を使用していることがわかる。このことはNS1がファシリテーターの役割を果たしていることと関係していると考えられる。まずトピックを決めなければこの日の実践活動ができないため、率先して話を進めていこうとしているからである。NS1がまずNNS2に話したいトピックを尋ねたことにより、トピックの中心はNNS2となる。NNS2は適切な語彙や表現がわからないとき、それらをマークし、他参加者による調整を得ながら、自分の言いたいことを表現していた。NNS2の話聞きながらNNS1も不明な点をマークしている。結果、NS1もNNS2も同じくらいの頻度で手段・方法を使用し、話に参加していた。したがって、この場における各自の役割は次のように言える。NS1は様々な手段・方法を駆使し、参加者の発話を引き出そうとファシリテーターの役目を果たしている。NNSは共にトピックの中心になる役割を交替し、自分が言いたいことを表現しようとしていた。その中で、不明な部分はマークし、それによって他者から調整を得ていた。

またNNS1においては、相手の言いたいことを理解する方法に、次の二つが見られた。一つは、不明な点に対して直接的に調整を求める方法である。つまり、「わからない」とはっきり述べたり、「それはどういう意味ですか」と尋ねたりする明示的な方法である。それに対してもう一つは、間接的に理解を得る方法である。これは自分が直接調整を得たり、要求したりするのではないやり方である。分析した会話の中で、NNS1・NS1共に、NNS2の意味するものがわからないときがあった。その際、NS1がNNS2に対して様々な手段・

方法で不明な点を明らかにしようと二人でやりとりを行う。NNS1はそのやりとりの内容を黙って聞いている。その後、NS1が理解を得ると同様、NNS1の理解にもつながっていく場面が見られた。このことはその直後に、NNS1自身が直接NNS2に対して理解確認を行っていることから確認できた。このように、NNSはいつも明示的にNSに調整を求めるだけでなく、他者のやりとりからでも間接的に理解が得られるということである。ここではNSと話しているNNS2だけが日本語の学習をしているのではなく、二人のやりとりを見聞きすることがNNS1の学習につながっているのである。これは相互学習の場となっているとも言えるであろう。

5-2-2 「カルチャーショック」(後半における前半部分)

「カルチャーショック」というトピックはファシリテーターであるNS1が出した。カルチャーショック経験の有無をNNS2に質問し、以降、トピックの中心はNNS2からNNS1へと交互に交替していく。最後はNNS2の話をNS1が代弁し、まとめている。

表2 (トピックの中心は、NNS2/NNS1/NNS2/NNS1/NNS2/NS1の順)

手段・方法	NNS1	NNS2	NS1	計	割合 (%)
他言語の使用			0/0/0/1/0/0	1	2.0
説明・パラフレーズ			0/0/0/2/0/1	3	5.6
同義語・類義語			0/3/0/2/2/1	8	14.1
対義語			1/0/0/0/0/0	1	2.0
具体化・具体例			0/0/0/0/0/1	1	2.0
単純化			1/0/0/0/0/0	1	2.0
先取り発話・代弁	1/0/2/0/0/0	0/1/0/0/0/0	1/2/2/1/0/0	10	18.5
理解確認	1/0/0/0/0/0		1/0/0/0/3/1	6	11.1
聞き返し		0/0/0/0/1/0	0/2/0/0/1/0	4	7.4
繰り返す	0/2/0/3/1/0	0/3/1/0/1/2	0/1/1/2/0/1	18	33.3
引き継がれなかった発話			0/1/0/0/0/0	1	2.0
計	2/2/2/3/1/0	0/4/1/0/2/2	4/9/3/8/6/5	54	100.0
	10	9	35		
発話回数	4/13/3/11/1/6	10/10/13/3/10/9	6/9/8/8/8/9		

表2における手段・方法の回数でも、NS1は他の二人と比べて三倍となっている。数字だけを見ると、ほとんどNS1が中心となって話を進めている感じを受ける。しかし文字化資料からは、NNS2の発話に対するNNS1の先取り発話や代弁、理解確認、NNS1の発話に対するNNS2の相づちによる同意などが観察できる。休憩を終えて活動も後半に入った辺りから、NNS1とNNS2は互いの言葉に慣れてきたのであろうか。NS1に調整を委ねるだけでなく、NNS同士で話を進めていこうという姿勢が見え始めた。その気配を感じ取ったNS1はファシリテーターの役割を転換した。率先して話を引っ張っていくのではなく、まずNNS二人のやりとりを重視し、二人が行き詰まったときに手段・方法を使っ

て支援することにしたのである。

5-2-3 「身体にいい食べ物」(後半における後半部分)

ここでは、NNS2 が出したトピック「身体にいい食べ物(「納豆」「キムチ」「ヨーグルト」「オリーブオイル)」について話をしている。NNS2 が出したトピックであるため、トピックの中心は NNS2 であったが、「ヨーグルト」では、NNS1→NNS2→NNS1 と中心の交替が見られた。表3ではトピックの順に回数を示している。ただし「キムチ」では手段・方法が見られなかったので省略する。「ヨーグルト」では話の中心が3交替したが、NNS1 中心のときだけ手段・方法が現れたので、それのみ挙げることにする。

[トピックの中心:「納豆」NNS2→「キムチ」NNS2→「ヨーグルト」NNS1→NNS2→NNS1→「オリーブオイル」NNS2]

表3 (トピック:納豆/ヨーグルト/オリーブオイルの順)

手段・方法	NNS1	NNS2	NS1	計	割合 (%)
他言語の使用			3 / 0 / 2	5	11.9
説明・パラフレーズ		6 / 0 / 0	4 / 0 / 0	10	23.0
同義語・類義語			1 / 0 / 0	1	2.0
具体化・具体例	2 / 0 / 0			2	4.8
先取り発話・代弁	0 / 0 / 1		1 / 0 / 2	4	9.5
理解確認		1 / 0 / 0	1 / 2 / 0	4	9.5
聞き返し			2 / 0 / 0	2	4.0
繰り返す	0 / 0 / 1	3 / 1 / 2	2 / 2 / 0	11	26.1
不理解の表明	1 / 0 / 0			1	2.3
発音の言い替え			1 / 0 / 0	1	2.3
表記			1 / 0 / 0	1	2.3
アプローチの変化			0 / 0 / 1	1	2.3
計	3 / 0 / 2	10 / 1 / 2	16 / 4 / 4	42	100.0
	5	13	24		
発話回数	11 / 11 / 4	16 / 11 / 8	20 / 10 / 8		

表3ではNNS2による手段・方法の回数が、会話前半から比べて増加したことがわかる。特に「納豆」で圧倒的に多い。これは納豆を知らないというNNS1に対して、NNS2が果敢に説明を行ったためである。ナカミズ(1995)では、「場面における特定の要因によって、ノンネイティブスピーカーは、言語能力が不十分であっても、完全に『受身』にならず、積極的に会話に参加することができる」としている。表3のトピックはNNS2自身が出したものであるため、NNS2にとって話しやすく、それに併せて発話回数も手段・方法の回数も増加したと言え、ナカミズの指摘にも当てはまる。

NNS1について見れば、「ヨーグルト」でNNS2の話に頻繁に相づちを入れている。またNNS1は「オリーブオイル」でNNS2の発話途中に先取り発話も行っている。これらことから、NNS1は積極的にNNS2が言いたいことを理解しようとし、先取り発話や具

体化・具体例という手段・方法を使い、自ら理解しようと試みた姿が窺える。

また表3には挙げなかったが、注目に値する点は「キムチ」での発話回数である。その内訳はNNS1が5回、NNS2が6回、NS1は1回であった。NNSがほぼ二人でやりとりを進めているのである。NS1による一回だけの発話内容も調整ではなく、自分のコメントを述べている。つまり、この場ではNS1による調整は必要なく、話を引っ張っていくというファシリテーターの役目もする必要がない状況であった。そのためNS1はNNS1・NNS2と共に参加者の一人となって話を聞き、自分のコメントを述べていたのである。

これらの場面における各々の役割をまとめると、次のように言える。NNS2がトピックの中心になると同時に、そのトピックに関して一番知識を持つものとして、NS1・NNS1に様々な情報を与える役目を果たしている。NNS1はNNS2の話をNSに頼ることなく、自ら手段・方法を使って理解していこうという姿勢が見えた。NS1はファシリテーターの役割をほとんど果たす必要がなく、一人の参加者となっていた場面もあった。

ここから見えたことは、やりとりにおいてNSが何でも知っていていつも教える立場にいるわけではないということである。確かにNSは日本語という言語面では優位な立場にあるかもしれない。しかしトピックによってNNSの方がそれに関する知識が豊富である場合、NSとNNSの役割が交替することは大いにあり得るのである。このトピックでは明らかにNNS2が情報を与える立場にあり、NS1は教わる立場にあった。「教える(先生)―教えられる(生徒)」「支援する―支援される」というNSとNNSの関係は固定的なものではなく、適宜変えられることが示唆されたと言えよう。そしてこれは、お話しグループにおける理念「参加者全員が対等な関係を築く」を達成した場面でもあったのである。

6 まとめ

本稿における研究目的と、分析の結果、明らかになったことを以下にまとめる。

(一) NS・NNS各々が、いま、ここで、具体的にどのような手段・方法を使って、相手が伝えようとしていることを理解しようとしていたか。

これに関しては、表1～3に挙げた様々な手段・方法を使用していたことが明らかになった。NSは様々な手段・方法を使用していたが、NNSにはやや偏りが見られた。全体的に繰り返しが多用されていたことがわかった。

(二) NS・NNS各々がトピックの中でどのような役割・役目を果たしていたか。

NS1はファシリテーターとして話を引っ張っていく役目を担ったり、不明な部分を聞き出して調整をしたり、一参加者として会話をしていたり、その場に応じて役割を変化させていた。トピックによっては、NNSが話の中心となって他の参加者に情報を与える立場となり、NNSもNS同様に様々な役割を担っていたことも明らかになった。またNNSは、自分が言いたいことだけを話してNSから調整を得るだけでなく、NNS同士でも話を進めようとする姿勢が見られた。調整もNSからだけでなく、NNSからNNSへも行われてい

た。不明な点に関しても直接的、間接的な方法によって理解を得ていたことが観察された。このことは自分が中心となっているときだけ理解を得、何かを学ぶのではない。他の参加者のやりとりを見たり聞いたりすることからも理解を得、学んでいたのである。したがって、参加者全員が何らかの学びを得る相互学習の場となっていたとも言えよう。NNS1もフォローアップインタビュー（以下 FUI）で、この点について次のように指摘していた。「他の人が出したトピックを通じて、いろいろ新しいことを習いました。日本語と一緒に他のことも習ったと思います」。NNS1の言葉は、お話しグループにおける理念である「相互に学び合う場を創る」ともつながっている。また NNS1 は、「話すとき、意味をよく伝えるために頭の中でよく考える。他の方法を考えたり、単語を替えたり、どのように言うかと分かりやすいかと考えて話した。そのことは日本語の勉強になりますね」とも述べている。この点はお話しグループの目標である「自分の言いたいことを日本語で表現する」とも合致する。したがって、参加者にとってお話しグループでのやりとり自体が学びにつながったということである。NS・NNS 関係なく、誰かが言おうとしていることを理解するために、各々が様々な手段・方法を使ってやりとりを行い、その結果、相互学習にもつながった。それが本稿で取り上げたお話しグループ 5 回目における姿であったとも言えよう。

本稿では活動の一回だけを取り上げ、その場で何が行われていたのか、その事実だけを分析した。したがって、手段・方法に関して、より詳細に検討する必要がある。談話分析の際にマークに関してもチェックしたが、今回の分析結果には取り入れなかった。今後どのように取り入れていけるか検討したい。また「理解」に関しても何をもって理解とするかは難しい問題である。FUI も NNS1 しかとれておらず、一回だけの活動分析で明らかにできたとは言えない問題も多い。こうした点は今後の課題としたい。

【参考文献】

- 大平未央子（1999）「接触場面の質問一応答連鎖における日本語母語話者の『言い直し』」『大阪大学留学生センター研究論集 多文化社会と留学生交流』第3号、pp.67-85
- 岡崎敏雄（1994）「コミュニティにおける言語的共生化の一環としての日本語の国際化—日本人と外国人の日本語—」『日本語学』Vol13、No13、pp.60-73
- 岡崎眸（2002）「内容重視の日本語教育—多言語多文化共生社会における日本語教育の視点から—」『日本語教育実習理論の構築（6・2）研究成果報告書』pp.322-339
- 金珍淑・野々口とせ（2004）「多言語多文化教室における参加者間の談話分析—非対称な力関係を示す発話行為を中心に—」『H16 年度研究成果中間報告書(研究論文編)』pp.66-80
- ザトラウスキー、ポリー（1993）『日本語の談話の構造分析—勧誘のストラテジーの考察』くろしお出版
- ナカミズ、エレン（1995）「在日ブラジル人と日本人との接触場面 会話におけるコミュニケーション問題」『世界の日本語教育』5号、pp.225-237
- 宮崎里司（2005）「日本語教科書の会話ディスコースと明示的(explicit)、暗示的(implicit)な調整行動：教科書談話から学べること・学べないこと」『早稲田大学日本語教育研究』7号、pp.1-25
- 森本郁代（2001）「地域日本語教育の批判的再検討—ボランティアの語りに見られるカテゴリー化を通して」『「正しさ」への問い』三元社、pp.215-347

（オカダ アヤコ・修士課程一年）